

第3章 関係性の権威

——教師と児童生徒の専門的人間関係から生まれる権威——

1 教師と生徒の専門的人間関係

「専門性の権威」と「人格性の権威」は、教師が児童生徒との具体的な教育・指導関係を結ぶ以前に、教育専門職として基本的に身につけていなければならない一次的な権威です。こうした権威によって結ばれた教育・指導関係は、さらに情緒的な絆を固め、教師が児童生徒から

“信頼すべき指導者”

として受け入れられることによって、いっそう円滑に展開することになります。私は、教師と児童生徒がこのような関係に立つことを、教育・指導関係における「専門的関係」と呼んでいます。この専門的関係から生まれる権威が「関係性の権威」です。教師の権威は、関係性の権威を持つことによってまさに教育専門職にふさわしい権威、すなわち豊かな指導力

を持つことになるのではないのでしょうか。

「この先生、できるなあ」

「なんでも、知ってるなあ」

という専門性の権威、

「この先生、立派だなあ」

「いい先生だなあ」

という人格性の権威、

これはどちらも、すでに述べてきましたように、それだけで指導力の源になります。が、これだけでは、専門職としての権威や指導力としては、まだ足りません。何故なら、いくら「できるなあ」

「立派だなあ」

と尊敬をもちえても、そこからもう一歩進んで、

「先生、大好き」

「だって、本当に心配してくれるんだもん」

という、愛され、信頼される関係にならなくては、子どもは心の底から教師の指導を受け入れる気持ちにはなっていないからです。

ここに、授業が巧みで、生徒へのあたりもやわらかくて評判のよい生活指導の先生がいます。『あんな子は転校でもしてくれたら助かる』と学校内でも評判の番長が非行を起こして警察に留置されました。この機会をとらえて番長に色々反省をさせ、立ち直りのきっかけにしたいと思って警察へ面会に行きました。しかし、日ごろ尊敬の眼差しで見てくれていた割には腹をわった話し合いのつてくれません。それどころか、二回目の面接ではかえって反抗さえされ、お手上げになってクラブ活動の先生にバトンタッチしました。その先生が行くと、叱られても反抗することなく、番長はとても素直に反省を示しました。そして、今後はああする、こうすると自ら遵守事項を挙げました。

これは、第一部第1章のA男の事例をもじったものではありませんが、よく見、よく聞くケースです。このようなことが起きるのは何も不思議なことではなく、クラブ活動の先生は毎日、ちようと親子が肌でふれあうがごとくに(たとえ、生徒の方がさぼることはあっても)、体をぶつけあつて十分に気持ちを通い合わせていたからです。

教師―児童生徒関係は、親子関係と同様に、日常的なふれあいの連続です。こうした毎日の生活の中から教師と子どもの絆が深まり、いつしか尊敬や畏怖が敬愛と信頼へと変わり、生徒の心は抵抗なく教師の指導を受け入れるようになります。授業の力や人格の高さを尊敬されるだけでは、極端に言えば、まだ外からのつながりにすぎません。子どもの心を底の方

から揺り動かすには、教師と子どもが心の内側からしつかりと手を取り合っていないとかならないのです。そのためには、常日頃から教師は、暖かい受容的な態度で、授業であれ、遊びであれ、何でも一体となつて、子どもとふれあっていることが必要です。

このように述べてくると、また、「裸でぶつかる」とか、「一緒に遊ぶ」とかいった考えが頭をもたげてきます。しかし、教師としての基本的な能力や資質が十分ではないところでのこのような考えや行動がいかにも誤つたものであるかは、すでに詳しく述べてきたところですが、それにしてもそのような考えや行動が実際にはいっこうになくならない、というよりもむしろいつの時代でも大変よく流行します。これはいったい、何故なのでしょう。

それは、教師―児童生徒関係というものが、親子関係や友人関係などの通常の人間関係とはつきり異なる専門的な関係だという認識が十分になされていないことに大きな原因があると思います。

ここで、「専門的關係」という言葉を用いました。それは多分、教育の世界ではあまり用いられてこなかった言葉だと思いますが、カウンセリングや心理治療の世界ではしばしば用いられる言葉であり、またそれだけに、常々、カウンセラーや臨床家の頭にしっかりと置かれていなければならない事柄なのではあります。教職の世界においてもこれを自覚することはまったく同様に重要なことと思われまので、これまで述べてきたことを少しばかり繰り返すことにはなりますが、ここできればこれ（専門的關係）について申し述べることにし

たいと思います。

カウンセリング関係や心理臨床関係における「専門的關係」とは、カウンセリング関係や心理臨床関係が通常の間人間関係とは構造的、機能的にまったく異なるものであることを示す言葉です。すでに述べましたように、心理臨床関係は、非権力性、非審判性、守秘性などを基本的な関係構造として成り立っていますが、これは単に人間学的観点から言うのではなく、任意的かつ私的に始められた援助・治療関係はどのような関係構造を持てばもつとも効果的であり得るかを治療論的に追求した結果でもあります。このこと（関係構造）の持つ大きな意味合いは、次に紹介するロジャースの言葉をもつて十分に知ることができるのではないでしょう。それは、ロジャースが自分の主張するクライエント中心（client-centered）のカウンセリングを社会的権威機関に所属するプロベーション・オフィサー（日本では、法務省の保護観察官、家庭裁判所の家庭裁判所調査官）が行い得るか、というテーマについて述べているところです。

もしプロベーション・オフィサーが、その担当する当事者（プロベーション対象者）が遵守事項を破ったときに、彼を施設収容するかどうかを決定する責任を持っているならば……プロベーション・オフィサーはカウンセラーであると言い得るでしょうか？ ……このようにプロベーション・オフィサーがクライエントを支配する権力を持っているのなら、プロベーション・オフィ

サーはクライエントとのカウンセリング関係を続けることはできません。何故なら、治療と権力とは、同一の関係の中には共存し得ないからであります。……関係に権力がかかわっているなら、完全に許容的な雰囲気をつくり出すことは不可能です。……もし、非行者がプロベーション・オフィサーとのカウンセリング関係の中で余罪があることを告白した場合には、プロベーション・オフィサーはただちに、自分がセラピストとオフィサーのどちらであるかを決めなければなりません。……カウンセリング関係とは、カウンセラーの暖かい受容といかなる強制も圧力もない態度とによって、カウンセラーがその感情、態度、問題を最大限に表出することが可能になる関係です。……この治療的關係は、日常どこにでも見られる権力的関係とは明らかに異なり、相容れないものである。

(Counseling and Psychotherapy, Houghton Mifflin, Boston, 1942)

ロジャースは、カウンセリング関係とは援助―非援助関係を支える当事者間の基本的なかわり方（関係構造）を離れてはけつして展開し得ない独自の構造と機能を持つ臨床関係である、と主張しています。すなわち、カウンセリング関係とは、カウンセラーのいかなる強制も圧力もない態度によって（関係構造……非権力性・非審判性・許容性）、カウンセラーがその感情、態度、問題を最大限に表出することが可能になる関係です（関係性）。このカウンセリング関係を、関係構造がまったく異なり、さまざまな強制や圧力のあるプロベシ

ヨンの当事者関係に持ち込むことは、ロジャースが言うように、たしかに不適切で矛盾に満ちた行為であると言えるでしょう。付言すれば、プロベーションにおけるオフィサーと対象者の関係は、プロベーションという機能が持つている独自の関係構造に基づいて、独自の「プロベーション関係」を形成しなければならないのです。

このように、親子関係や友人関係などの通常の間人間関係とは異なり、特別の目的と独自の関係構造を持つてそこから独自の関係性を発展させる関係が「専門的關係」です。

さて、教育・指導関係は、カウンセリング関係やプロベーション関係とまったく同様に、独自の関係構造と関係性を持つ専門的關係です。すでに述べましたように、教育・指導関係には、まだ未熟な「子ども」にある種の規範や基準に従って教育・指導しなければならぬという性質上、必然的に「強制性」「審判性」、さらに上—下・管理—被管理といった「権力・統制性」などの関係構造が存在します。教師はこうした関係に立って、子どもの感情や態度や思考や行動を、悪ければ悪い、よければよいと明確に判断（審判）し、正すべきはきちんと正してやらなければなりません。これが、社会から、また子どもの側からさえも期待されている教師の役割と機能です。

しかし、そうは言っても、一方的に判断され、統制される関係というのは、必ずしも心地よいものではありません。教師や学校の判断に異論があれば、言いたいこともあるでしょうし、反論したいときもあるでしょう。けれども、ほとんどの場合、子どもの側が抑えられ、

屈服することになります。傷つき、苦しみ、ときには反抗したくなるのも当然です。

こうしたかわりの中でなお学校・教師と児童生徒を根元のところでつなぎ合わせ、指導関係を支えるのが、まさしく教師の権威です。日ごろから、子どもが教師を、学識・技能に優れ、豊かな人格・人間性を持つ人物と認めればこそ、すなわち教師として適格者だと認めるからこそ、ときには疑問を感じても、そしてときには衝突をしたとしても、なお教育・指導者として受け入れ、関係を保つのです。もし教師に権威が認められなければ、つなぎとめる礎石がないために、子どもは教師の指導に従わず、反抗したり、攻撃したりするでしょう。かつて吹き荒れ、そして今、深く静かに潜行している対教師校内暴力はこれを典型的に物語っています。このように、教師の権威は、強制的、審判的、統制的関係構造の中においては、必要欠くべからざる条件なのです。

教師と子どもの関係は、そのときだけのものではなく、過去から現在、そして未来にわたって継続していくものです。教師権威が基本的に要請されている関係性の中で、子どもから権威を認められていない教師がいくら情緒的にふれあったとしても、それは教師にとっても子どもにとっても、そのときだけのなぐさめしかありません。何故なら、子どもはそのような教師に受け入れられても特別に大きな喜びとはなりませんから、その後の教育・指導関係にほとんどポジティブな影響を及ぼすことはないのです。先程引用した大村はま先生をもう一度、引用したいと思います。

いくら（教師の）年が若くて、子どもがかわいいという目つきで見たり、可愛いという言葉をかけてやったり、いっしょに遊んでやったりしたとしても、そんなことは、たわいもないことだと思っんです。いっしょに遊んでやれば、子どもと同じ世界におられるなんて考えるのは、あまりに安易にすぎませんか。

そしてむしろ、子どもからともと権威を認められていない教師が情緒的にふれあおうとすることは、子どもの気持ちを持ただ安易にさせたり、甘やかすだけの結果になったりして、かえって教育・指導関係を歪めたりすることも少なくはありません。これに対し、基本的な教師権威を備えた教師がそれを行えば、教育・指導力の源としての専門性の権威や人格性の権威を、教科指導の領域からさらに生活指導や生徒指導の領域における教育・指導力の源として押し広げることが可能になります。何故なら、豊かな権威を認める教師からやさしく情緒的にアプローチされることは、子どもにとっては大変大きな喜びであり、教師といっそう近しくなろうという気持ちを沸き立たせ、教師の指導に対して十分に受容的にならせるからです。このように、教師権威のないところの情緒的關係はたいした意味もない（しかも、ときに有害な）単なる情緒的關係にすぎませんが、教師権威のあるところの情緒的關係は、教師に対する敬愛や信頼を生む専門的な關係なのです。教育・指導關係というものが、こうした

専門的關係であることを認識しないところに、ただひたすらに「裸でぶつかる」とか「子どもとともに遊ぶ」といった単純なスローガンが生まれます。教師たるもの、教師―児童生徒関係は単なる人間関係ではなく専門的關係であることを、しっかりと自覚しなくてはならないであります。

そこで、ここで改めて、教師―児童生徒関係における「専門的關係」を定義し直し、その教育臨牀的な意味をまとめておきたいと思います。

教育・指導関係における専門的關係とは、「基本的な教師権威を備えた教師が受容的、共感的な態度で生徒に接することによって生み出される、生徒からの敬愛と信頼に満ちた関係」であり、それは、「強制性・審判性・統制性といった、子どもにフラストレーションをもたらす関係構造をそのまま有益な教育的関係に転ずることを可能にする」ものです。

それでは、関係性の権威を確立した教師がいかに円滑に教育・指導や学級経営を行い得るか、事例を挙げて見てみたいと思います。大変恐縮ですが、引き出しついでに、これもまた、私の思い出（福岡県・桂川中学校）の中にある先生のケースです。

私が中学二年のときの学級担任は、右田正徳先生でした。先生の担当は社会科でしたが、思い返してみると、先生の授業とホームルームの時間はいつも「お話」がいっぱいでした。それは授業時間の三分の一から半分を超えることもざらで、ときには全部「お話」で終わっ

たこともありました。『お話』の種類は、寓話・小咄・落語・漫談・外国文化の紹介などなど、きわめて多岐にわたり、中学生の頭ではどれくらいの数のカテゴリーになるか分からないほどでした。真偽のほどは今もって分からないのですが、ソ連に抑留されていたときのこととか、ソ連の女性は入浴時に乳房は隠しても前は隠さないので実によい眺めであったという、見てきたかのような話など、思春期の心をよくくすぐられたものではありました。

先生が入室して礼が終わると、生徒たちはきまつて

「お話、お話、お話をしてえー」

と、まるで幼児のように甘えます。

先生は、微笑をたたえたやさしい眼差しでこたえながら、しばらく黙っています。生徒たちもすぐにひっそりとなつて、真剣に先生を見つめます。それはちやうど、力士の立ち合い前の仕切りと同じでした。先生と生徒が、『お話』から入るべきか『勉強』から入るべきか、互いに探って呼吸を合わせているのです。

瞬時、納得したように先生が決断し、教科書を開き、あるいは、

「それでは」

という言葉とともに、教科書が机の片隅に追いやられます。

が、どちらになつても、すでに生徒たちもあうんの境地、たとえ教科書が開かれても、誰も不平を洩らしたりはしませんでした。

先生は、待望久しく女兒に恵まれたとき、「カズコ」と名づけました。名前の由来は、その名前の女生徒がクラスに二人いて、どちらもとてもよい子だから、ということでした。「カズコ」はクラスで上位を競い合う成績上位者でしたが、先生が子どもの誕生と命名の由来を明かすと、教室が割れんばかりの大拍手が起りました。誰もみな、自分たち全員が褒められ、まるで自分の名前がつけられたかのような気分になって、「カズコ」の誕生と命名を祝福したのです。

先生は、休み時間中や放課後にも、よく教室や運動場に顔を出して、

「やってるな、がんばれよ」

「負けるな、応援するぞ」

と、さり気なく声をかけたり、ときには一緒に遊んだりして、生徒たちに変な親近感を持たれていましたが、このことがあって後はいつそう近い存在になりました。その先生に励まされて、クラス全員よくまとまり、掃除・当番・勉強・課外活動と何でも活発に行われました。

右田先生もたまには小言を言い、叱ることもありましたが、しかし、誰もそれを素直に聞き入れ、不平を言ったり、陰口を言ったりする者はいませんでした。ただ一回だけ、クラスで一番の元氣者が（乱暴者といった方がよいかもしれませんが）先生に楯突いたことがあります。それはホームルームの時間でしたが、運動部の選手だったその生徒が、試合を数日後

にひかえているから掃除当番を休ませてほしいといったのを拒否されたときです。

「先生、ぼくが負けてもいいと言うんか。学校の名誉もかかっているんやけど」

「それは分かるんだけど、やっぱりみんながやることはきちんとやってからにしないさい」

生徒は気色ばんでいます。先生はいつもと同じ穏やかさです。

生徒がなおも突っ張ります。

「じゃあ、みんなに聞いてくんしゃい、ぼくが試合のために掃除当番を休んでいいかどうか。それで決めてくんしゃい」

ここで先生は、いつもと同じ口調でしたが、しかし、きっぱりと言いました。

「それは、先生が決めます。今はもつといろいろな伝達事項があるから、あとで職員室で話し合おう。終わったら、来なさい」

生徒は、それ以上、突っ込みませんでした。そして、その後も職員室には行きませんでした。同じような問題が他のクラスでも起きていたのですが、きちんと与えられた役割を実行してから練習に励んだのは、結局、この生徒だけでした。

幅広い知識と巧みな授業が視野の広がり始めた生徒たちの興味を十分に満たしていました。やさしく包容的な人柄が日常的なふれあいを通し、敬愛と信頼の対象になっていました。関係性の権威が培われ、それによって生徒たちをのびのびと育て、動機づけ、きわめて円滑

に学級経営を行っていました。関係性の権威とは、このように豊かな指導力を発揮させる専門職権威ですが、それは教師と児童生徒との間の「専門的人間関係」から生まれてくるのです。

2 関係性を構築する

学識・技能に優れ、豊かな人間性に恵まれているならば、比較的容易に子どもたちと結ばれ、いわゆる関係性の権威を身につけます。しかし、大勢の子どもの中には、そういう関係を結ぶことが大変難しい子どもも少なくありません。好ましくない言葉ですが、いわゆる「問題児」です。例えば、第二部第1章の事例に出てくるD男とE男がそれでしょう。

このような子どもに対しては、たくさんの子どもを一斉に対象とする通常のやり方では、その子どもとの間に専門的な人間関係を築くことはできません。特別な配慮を持って子どもとふれあい、固有な関係の中で個別的な指導を行わなければならないのです。D男に対するE先生のアプローチがちょうどその例ですが、もし教職が専門職であるなら、こうした個別的な処遇をなし得る技術を持って初めてそれにかなうのではないのでしょうか。

個々の生徒との個別的な関係性を構築するには、すでに述べた発達臨床心理学的な知識と技術が必要になります。教師はこれを駆使して、理解し、ふれあい、指導します。しかし、

実際のケースではまさにそれぞれが個別的な問題をかかえ、個別的な対応（処遇）が求められていますから、ここで一般性のあるケースを紹介するなどということは、とてもできません。ここでは、D男のケースの続きを紹介し、関係性の構築とはどのようなことなのかを知るよすがにしたいと思います。

E先生は、D男の奇矯な行動を取り除き、そして、望外にも学習意欲まで駆り立てることに成功しました。しかし、思いもよらぬ困った問題が生じました。それは、学校内では少しも問題を示さなくなったのですが、家庭内ではそれと逆行して、以前には口を利かない、すねるといったことだけだったのがいつのまにか反抗的になり、手に負えなくなっているというのです。特に「義父」に対しては、

「家を出ていけ」

と言ったりして、まるで仇に対するようだということです。

先生はびっくりしました。学校でこんなによくなくなったのだから、さぞかし家でも変わっただろう、と思い、

「よい先生に当たって本当によかった」

などと言ってもらえるのではないか、と淡い期待もあつて、家庭での様子を訊こうと、浮いた気持ちで電話をしたところ、母親から涙まじりに聞かされたのでした。

先生は早速、D男を呼んで訊いてみます。

「D男、どうしてお父さんに、出ていけ、なんて言うの？」

「あんなの、お父さんじゃないよ。本当のお父さんは、とつくに死んでるよ」

義父の働いている給料で生活が成り立っていること、母親がD男にすまないと思いつつも義父と結婚したがつていること、二人がとてもD男のことを心配していることなどなど諄々と諭しても、D男は何とも受けつけません。このD男の態度で、D男の家での様子は大体分かりました。分かりましたが、しかし、そのあとどうしたらよいのかが分かりません。

そのうち、夏休みになりました。D男がアパートに遊びにきます。もつとかわいがり、もつと仲よくしたらD男の気持ちが和み、家でも「よい子」になるかと思いい、先生は遊園地に連れていったり、プールに連れていったりしました。しかし、夏休みがまだ半分も終わらないときに、

「乱暴こそしないが義父にさからって困る。なんとかしてもらえないか」

と、母親が泣いて訴えにきました。

先生は、まったく困りました。自分との間では何も問題はなく、むしろ「素直な」よい子なのです。そこで、こういうときこそ利用するところだと思い、地区の児童相談所に、ひとりで相談に行かせることにしました。

D男は初め、怪訝な顔をしましたが、

「お母さんたちと仲よくする方法を相談しに行くんだ。いまのままでいいわけないだろう」と言われると、意外に素直に従いました。これは見込みがある、と先生は喜びました。

しかし、二回目の面接が終わったところで、先生は、児童相談所の先生から、「D男が次からは来ないと言っている」と、連絡を受けました。

D男がやってきて言います。

「もう、相談所には行かないよ。ぼくには先生がいるからいいよ、先生だけでいいよ」

この言葉を聞いて、先生は、あつと胸を突かれました。

「D男をだめにしていたのは、ぼくだった」

と、血の気が引く思いでした。

「こんな自分との関係があるから、親とも相談所の先生とも、素直な、好ましい関係が結べなくなっていたんだ！」

先生は、D男が「いい子」になったのが嬉しくて、「先生、先生」と慕われるのが心地よくて、つい親子関係や兄弟関係のような関係になってD男を引きつけすっかり依存させてしまっていたことに、遅ればせながら今ようやく気づいたのです。つくられるべきは、自分（教師）に向けてではなく、親に向けての甘えられる関係だったのです。

先生は、児童相談所の先生とも相談して、「作戦」をたてました。骨子は、教師（自分）

との関係から自立させ、愛情関係の対象を（義父を含めて）親に向けさせて、親子関係の絆を築くことでした。

二期の初めの日、先生は、いつもの道で、いつものように、D男に追いつきます。そして、言いました。

「あしたから、しばらくこの道通れないんだ。学校でいろいろやらなくてはいけないことがたくさんあって、早く行かなくてはならないんだ」

D男は一瞬、びっくりした顔をしましたが、

「でも、またすぐに、ここ通るよね」

「うん、すぐってわけにはいかないけど、仕事終わったらな」

D男の顔が、一瞬、さびしげにくもりました。

その日、先生はクラスの間関係を見るために、ソシオメトリック・テストを行いました。そして、次の日、その結果を利用して二期の班構成をして席を並べ替え、次のように、言いました。

「一学期はみんなで選挙しましたが、二期は先生が班長を決めることにしました。決めた基準は、班長を上手にやれそうな人、そして、班長をやらせてがんばらせてみたい人です」

先生は、ひとりずつ班長の名前を呼んで立たせ、
「お願いします。がんばってください」

とあいさつします。

最後の班の班長がD男です。D男は名前を呼ばれて、瞬時とまどい、いぶかしげに先生を見ながら立ち上がります。委細かまわず、先生は

「お願いします。がんばってください」

と言ってから、一呼吸おき、

「D男君もがんばり屋の一人です。一学期間、がんばってください」

と、特別に言葉をかけました。D男は思わず頭をかきましたが、すぐにまじめな顔に戻って肯き、先生を見返します。力が入っています。昨日から見せていたさみしげな顔はもうどこかに飛んでいます。本当に一瞬のことですが、先生と生徒が目と目でしっかりと気持ちを確かめました。

D男には班をまとめる力がけっこうありました。班別競争で負けると、みんなを慰めたり、班員のひとりが風邪で休んだときにはみんなを誘って見舞いに行ったりしています。先生はこんなD男の様子を、電話で母親に伝えました。そして、次週の保護者参観日には必ず二人で来てくれるように頼みました。母親は

「そんなことをしたら、かえってD男が怒るから」

としぶりましたが、説得しました。

当日、約束どおり、二人でやって来ました。D男が少しうわずっています。時々、ちらち

らつと、がまんできなくなるのか、うしろを見てしまいます。『義父』はなるべくD男と目を合わせないようにしています。

その日の『仕事』は、運動会の際のリレーで使うバトン用のたすきを作ることでした。そして、最後に班長が各班の仕事の経過や出来具合を報告するのです。

D男の番になりました。珍しいことに、D男が赤くなっています。いつもよりはたどたどしくなったけれども、一応きちんとこなしました。母親と義父は、眩しそうに、驚いたように、見ていました。帰りしな、先生は二人を教室の外まで送って、

「今日は、無理を言ってすいませんでした。……帰ったら、ほめてやってください」と、言いました。

「あんなにおとなしく、きちんとやったのは、初めて見ました」

と母親が感無量と言う横で、義父は

「本当に、ありがとうございます」

と深々と頭を下げました。生真面目で、おとなしそうな人です。

先生が教室に戻ると、帰らないでいたのか、D男が待っていました。

「先生が呼んだの？」

と訊きます。

「誰を？」

先生は不意打ちをくってどぎまぎしています。D男が黙ったまま見つめてくるので、いっそう慌てました。そこで、つい、

「お父さんかい？」

と、言っていました。言ってから、しまったと思いました。もうあとの祭です。D男は、まだ義父を認めていないのです。だから、母親がどんなに「お父さん」と呼んでくれと頼んでも応じてはいなかったのです。

しばらく二人は無言で見つめ合います。

「どうして呼んだの？」

と、今度は詰問調です。先生は、すっかりうろたえました。

「ぼくは呼ばないよ。たまたま電話したら、お父さんが出て来たので、今日のこと、言っただけだよ。ほんとだよ」

また、言っていました。その上、嘘までついてしまいました。

どういう気持ちでいるのか、D男は何も言わないで、また、じっと見つめてきます。先生はもう、完全にメロメロになってしまいました。

「ごめん、ぼくが来てくれて頼んだんだ。でも、お父さん、喜んでいたよ。先生がそう言うてくれるから、学校に行けるって。これは、本当だよ」

もう、白状するほがありません。でも、また嘘をついてしまいました。

「分かったよ」

と、半ば怒ったような声を出したかと思うと、D男はくるっと背中を回して、そのまま走っていったしまいました。

しかし、次の日、D男には別に変わった様子もないので、先生は一安心しました。が、何か怖くて、このようなやりとりがあったことを母親に言うことはできませんでした。

そうこうするうちに、明日が運動会という日、母親から電話がありました。

「D男が来ていいって言うから、二人で行きます」

母親の声は弾んでいました。先生は、胸につかえていたものがすーっと通ったような気持ちをして、ふと、思いつきました。

「明日、一番前に席を取っておきますから、お父さんが朝起きして取ったということにしてください」

運動会の日、席取りは、当日でなければいけないことになっていました。毎年のように、真っ先にまだ暗い夜中に起き出してくる人たちがいるのですが、その人たちは、誰が置いたのか、最前列の一番見晴らしのよいところに小さな日の丸の旗のささった一枚のむしろが置いてあるのを見つけました。

運動会は順調に進んで、五年生の親子二人三脚になりました。子どもたちがみんな親の席に飛んで行って親を連れ出します。これがまた、楽しい雰囲気です。このときとばかり、父

親たちが大勢、母親を振り切って出て行きます。D男は、母と義父を見比べて一瞬迷ったようでしたが、すぐ母親を手招いて呼びます。母親はちよつとの間、惜しそうに未練がましく義父を見ましたが、諦めて立ち上がりします。

そのとき、こうした様子をスタート地点で見守っていたE先生が、怒鳴りました。

「D男、だめだ、だめだ。お母さんじゃ、だめだ。お父さんじゃなくっちゃ」

その声の大きさに、みんなびっくりしてそちらを見ます。それに構わず、先生は今度は猛然と走って来て怒鳴ります。

「だめ、だめ。女は鈍いからだめ、男でなくっちゃ」

その勢いに、思わず子どもから手を放してしまった母親もいます。先生は、D男たちのところまで、一目散に飛んでくると、またまた怒鳴りました。

「お父さん、お父さん。急いで、急いで。もうみんな、集まってるんだから」

見ると、すでに大半の親子がスタート地点に集まっています。しかし、どうすることもできずに、義父は座り込んだままです。

「ほら、D男。はやくお父さんの手を引っ張って！」

先生は、そう叫びながら、見物席に立ち入り、義父の右手を引っ張ります。

母親も後ろに回って、義父の背中を押します。でも、義父は、いやいやをするように、戸惑って、動きません。

「お父さん、はやく、はやく。ほら、D男、はやく、はやく」

先生も必死です。その先生の声に励まされて、義父が腰を浮かせかけました。でもまだ、もぞもぞしています。それを見て、D男が叫びました。

「急いで、急いで、お父さん」

一瞬、義父と母親が、息を止めました。次の瞬間、飛び上がるように義父が立ち上がりましました。あとは、二人で手をつないで、一目散に駆けて行きました。

私たち教師は、親子関係の好ましくない家庭の子どもとたまよい関係が持てると、
“こんな子どもとどうしてうまくいかないんだろう。よほど教育力のない親に違いない”
と思います。

同じ論理で、担任と折り合いの悪いよその組の子どもと親しくなった教師は、
“あの先生、なんて教育力がないんだろう”
と思ったりします。

最近学校に取り入れられるようになったスクールカウンセラーの中にも、対象の子どもと親しくなあって、とりわけ若いカウンセラーには、こういう傾向が見られます。

しかし、これは誤りです。

何故なら、人は重みのかかる生活領域では深刻な混乱や葛藤に陥りやすく、いったんそう

なると当事者だけで解決することは大変難しいことなのですが、これに対して、そうした人
にいわゆる情けや憐れみをかけて親しくなるのは、ほとんど誰にでもできるたやすいことで
あるからです。親といがみあつたら、担任教師と衝突したら、どんな子どもどこかほかに、
自分を支えてくれるものが欲しくなります。このようなとき、まだ生活領域の狭い子どもた
ちであつてみれば、まず身近な生活の場で支えとなる代わりのものを求めてきます。親と不
仲になれば担任の教師へ、担任の教師と折り合いが悪ければクラブの先生へと関係を求める
のは自然の成り行きです。つまり、子どもは担任の先生と、あるいは隣の組の先生やクラブ
の先生、さらにはスクールカウンセラーの先生と結びつきやすい状態に初めからなっている
のです。このケースのD男もそれで、初めそれを「注意獲得反応」という未熟な形で表わし
ていました。

このような子どもと情緒的に結びつくことは実にたやすいことですが、私たち教師の仕事
はそこで終わるのではなく、そこから始まってなるべく早く、子どもを本来の場所に戻して
やることにあります。そのための関係づくりが、ここで言う「関係性の構築」です。すなわ
ち、関係性の構築とは、臨臨床的な指導そのものでもあるのです。

しかし、大変残念なことに、このことを自覚している人はきわめて少ないように思われま
す。子どもに慕われて「親」の役割や「兄弟」の役割をとるということは、とてもぬくぬく
として心地よいもので、それが代理的に求められていたものであることに気づかず、あ

るいは気づいているときでさえ、私たちはつい、そこに長くどまろうとしてしまいます。これは、子どもにとつては大変不幸なことです。D男のケースでも分かるように、それはもつと大切なところでの不適応をますます強めてしまうからです、このような不幸な例は教育やカウンセリングの場に少なからず見られます。

例えば、学校と対立する生徒たちにたった一人だけ頑固な「理解者」がいたばかりに気持ちを煽られたかれらが校内暴力を起こした例、親子関係の悪い子を下手に「受容」して親子関係をいつそう悪化させ家庭内暴力を誘発した例、内気で神経質な子を特別に目をかけてこまごまとした配慮をし面倒を見たのが仇になりかえって子どもを神経質にしてノイローゼにしまった例など、いくらでも挙げられますが、これらはかなり一般的なケースでもあります。こういう意味では、クラブ活動の先生や生活指導の先生、あるいは養護の先生やスクールカウンセラーの先生などは、立場上、子どもたちと濃密な関係になることが多いので、こうした関係や結果に陥ることのないように、十分に注意しなければならないと思います。

このような、当該教師との関係は「よい」けれども、知らぬ間にほかのところでの不適応を促進したり誘発したりする教師―児童生徒関係は、もちろん、ここで言う専門的関係ではなく、これとはまったく相反する関係です。すでに言わずもがなとは思いますが、ここで言う専門的関係とは、子どもが意識しているしていいにかかわらず、子どもにとって本来的に望まれているものを見出し、実現していく関係であり、関係性の構築とは、そうした関係

をつくり上げていくことなのです。

こうして、教師と子どもとがしっかりと結ばれ合ったとき、子どもにとって教師はまさしく関係性権威そのものでありましょう。